



よい「空気感」をもつひとになる、心地よい「空気」をつくる

校長 小樋山 寿幸

表題の「空気感」とは、「特定の人・物・事象がかもし出すその場の雰囲気（※新明解国語辞典8版より）」のことを、また「空気」とは、「その場の人たちを支配する志向のあり方（雰囲気）※「同辞典」より」を言います。



笑顔を絶やさないひとは、どんな「空気感」の持ち主でしょうか。きっと、周囲を和やかにする雰囲気を作り出していることでしょう。また、仲間に対し思いやりをもってかかわるひとはやさしい雰囲気を醸し出していることでしょう。その一方、不機嫌そうな顔でイライラしているひとは、どうでしょうか。

「空気」は、例えば「場の空気を読む」などのように使われます。その意味は、「察する」「理解する」といったものです。その場にいるひとたちは、「その場の雰囲気」を理解し、どのようにふるまえばよいか考え、行動します。

「場の空気を読む」ことは大切です。例えば、卒業式などその場に応じた適切なふるまいをすることが「自分にとっても、他者にとっても大事なこと」だからです。また、この「空気」が、所属するひとたち（例えば、学級の子どもたち）の心地のよさに大きく関係することがあります。

心地よい「空気」をつくるには、相手への「尊敬と感謝」が根底にあることが大切です。そのうえで、「話しやすい」「助け合う」「挑戦できる」「新しいことを受け入れる」という4つの条件がそろうことにより、ひとは安心して、その場所で活動することができるのです。

また、「あれ？これちょっとおかしいな。」という違和感をもち、声に出して、よいふるまいをすることも「よい空気」を作り出すうえで大事になります。このとき、「これくらい、まあ、いいか」という「あいまいさ」が、「よい空気」を作る妨げになります。

さて、この度、「相手を大切にする、傷つけない言葉やふるまい」について学級で話し合い、明らかにしてもらいました。言葉やふるまいは、「心」の現れです。丁寧な言葉を使うことやふるまいをすることで、穏やかな「心持ち」になっていきます。丁寧な言葉をつかい、丁寧にふるまうことが、「(そのひとの) よい空気感」を強め、それらが影響し合って「心地よい空気」を作り出します。

子どもたちだけでなく、私たち学校職員も丁寧な言葉遣いとふるまいには十分に心を配り、取り組み、心地よい場としての学校づくりを努めてまいります。おうちでも、ぜひ、お子さんと丁寧な言葉遣いとふるまいの大切さについて話題にしてみませんか。



「東小つうしん（巻頭ページ）」に関するお問い合わせは、校長（電話：42-2674）へお願いします。

第 2 回 「校歌のお話」



当校の校歌は、宮柊二先生（作詞）、細谷一郎先生（作曲）両先生の手により、開校から 2 年後の 1978 年（昭和 53 年）3 月 1 日に制定され、同じ年 6 月 13 日（火）に校歌発表会が行われました。以下は、校歌発表会のリーフレット（一部）になります



五泉市立五泉東小学校 校歌発表会

昭和53年 6 月13日（火）



宮 柊二先生



細 谷 一 郎 先生

略 歴

- ・大正元年 新潟県北魚沼郡堀之内町に生まれる。
- ・本名 肇
- ・昭和3年旧制長岡中学校在学中に短歌をつくる。
- ・昭和7年上京、北原白秋に師事し、白秋門下の優秀として知られる。
- ・昭和28年歌誌「コスモス」創刊主宰。
- ・朝日新聞、新潟日報歌壇、宮中歌会などの選者となり、戦後歌壇の中心的存在。
- ・毎日出版文化賞、読売文学賞、歌謡空賞受賞の歌集著作多く、その業績によって昭和52年6月日本芸術院賞受賞

現住所

東京都三鷹市井の頭1丁目2番17号

略 歴

- ・山田耕筈先生に師事。
- ・30年余NHKの音楽を担当する。
- ・オスカーワイルド原作サロメ（日本語訳）を歌劇に作曲、日本青年会会館に於て上演し音楽新聞社主催作曲部門第1位受賞。
- ・演劇「大日向村」の作曲、指揮。
- ・交響的舞踊「建設」の作曲、指揮。
- ・劇舞踊「お里沢市」の作曲、指揮。
- ・宝塚劇場の作曲家並びに宝塚音楽学校の教授を歴任。
- ・交響詩「鎮魂歌」、子供のための交響曲、みつばちふんふん、なかいなか等作品あり。

現住所

茨城県稲敷郡笠崎村高見原2303の856

次 第

開会のことば

1. 校歌発表
2. 学校長のお話
3. お祝いのことば
4. 花束贈呈・よろこびのことば
5. 作詞者のお話……………宮 柊二先生
6. 作曲者のお話……………細谷一郎先生
7. 歌唱指導……………細谷一郎先生

閉会のことば

さて、校歌はどのような過程で作られたのでしょうか。当時の文書から紐解きます。

当時、教頭でいらした鶴巻斉先生が、宮先生の門人でいらっしゃった先生を通じて校歌の作詞をご依頼されました。その後、宮先生より快諾いただき、昭和 52 年 11 月 27 日（日）に、宮先生を五泉東小にお迎えすることが叶いました。

当時の黒精治校長先生が、来校くださった宮先生へのお礼のお手紙の中で、校歌や宮先生のお人柄に関することについて、子どもたちが書いた作文の一部をご紹介されていました。（以下、黒先生のお手紙より抜粋）

- ・ きょう、つくってくださるとばかり思っていたんですが、心を込めて長く考えて、校歌をつくには二年もかかるのだそうです。
- ・ どんな歌ができるの。
- ・ ぼくたちが手をふったら、ふり返って手をふってくださったよ。
- ・ 宮先生にサンタクロースになってもらいたいなあ。
- ・ ぼくたちが卒業しないうちに作ってください。宮先生。

また、作曲くださった細谷一郎先生は、宮先生のご紹介によるものでした。細谷先生は、山田耕作先生（代表作：「この道」「赤とんぼ」「待ちぼうけ」）の優れた弟子の一人です。

こうして、両先生とのご縁が生まれ、1978 年（昭和 53 年）に校歌誕生を迎えることができました。